

# 花水木



Yasumoto Yuuki

## 安本 侑生 (72期)

著者近影、事務所の一角にて

中学生位からだろうか、小説を読むのが好きだった。当時伊坂幸太郎や石田衣良、江國香織の作品が多数映画化されていたこともあって、彼らの作品を読んでいる人が多かったように記憶しているが、私は流行りものは流行ってから何年か経ってから読めばいいと思うたちだったので、少し前の作家を好んで読んでいた。日本の作家で言えば、いわゆる80年代の作家と呼ばれる村上春樹、村上龍、もう少し前の世代の三島由紀夫、外国の作家で言えば、もう少し幅広く、ガルシア・マルケス、トマス・ピンチョン、ポール・オースター、ジョン・アーヴィング、カズオ・イシグロなんかを熱心に読んでいた。特に村上春樹については、彼の長編はもちろんのこと、短編、エッセイ、翻訳など当時公刊されていたものはおおよそ目を通していたと思う（もともと私の中でのベストワンは、村上春樹の著作ではなく、ブルガーコフの「巨匠とマルガリータ」であることはご容赦いただきたい）。それに加えて、大学生時代には現代詩を読むようになって、特に戦後の詩人、田村隆一、谷川俊太郎、もう少し後の時代の松浦寿輝、朝吹亮二の詩集を熱心に読んでいた。大学生時代は多くの皆様と同じように暇を

持て余していたこともあって、一時期は一日に一冊位読んでいた時期もあった。もっとも、弁護士になってからというもの、正直言って昼夜休日問わず働いていることもあり、あまり本を読む時間が取れていない。正直なところ、良くてひと月に一冊、2024年に至っては、4月現在まだ一冊も読むことができていない。最近本を読もうとすると、自分の体力・集中力が十代の頃と比較して相当に落ちていることや、日々の仕事で集中力を使い果たしているせいでいかに読書が体力・集中力を使う作業であるかを再認識させられている。私は、大学生時代から、新潮クレスト・ブックスを、そのデザインや現代的な海外の作家にフォーカスをあてているという珍しさから、ほぼ毎月出版される度に購入しているが、読めないまま「積読」されている本が日々増えていってしまっている。

そんな怠惰な私に戒めを込めて、手元にあるが未読の本の一部を紹介したい。マリオ・バルガス・ジョサの「ガルシア・マルケス論-神殺しの物語」、マーカス・デュ・ソートイの「数学が見つかる近道」、エマ・ストーンケスの「光を灯す男たち」、ドン・デリーロの「ホワイトノイズ」がまず本棚で悠然と目立っている。

内容は読んでないので全く分からないが、もし読んだ人がいれば、別に教えてくれなくても構わないので、この世に同じ小説を読んだ人が自分以外にあと一人くらいはいるんだなあと思ってもらえたらとても嬉しい。

私も今年の7月で30歳になる。迫りくる40代を「ある朝目が覚めて、ふと耳を澄ませると、何処か遠くから太鼓の音が聞こえてきた」と表現したのは村上春樹だが、確かに30歳ともなると日々老いや死を感じる年齢に近づいているのがよく分かる。ポール・ニザンは「僕は二十歳だった。それが人の一生でいちばん美しい年齢などとだれにも言わせまい」といった。二十歳の頃に戻りたいとも思わないが、二十歳前後が人間の肉体的なピークであることは言うまでもない。

私の人生のうちで毎年10冊本を読むとして、80歳まで生きたとしても500冊程度しか読むことができない。この世の本の全てを読むのはもう無理だということは既に分かっているものの、せいぜい私の仕事用机の右隣りにある未読の本棚を空にしてから人生の終わりを迎えたいものである。

